

『映画監督はこれだから楽しい わが心の自叙伝』 大森一樹 (リトルモア刊 / 発売中) のデザイン

イラストレーション(カバー扉)……伊野孝行

わが心の自叙伝

# 映画監督は これだから楽しい 大森一樹

リトルモア

Originally  
November 2023

オリジナル 26

『映画監督はこれだから楽しい  
わが心の自叙伝』のデザイン 1  
思い出のクリフォード 7  
日日読書 7  
メモランダム・本のデザイン 8  
続・ぼくの映画館は家から5分 9

昭和残照 10  
N'S COLUMN 11  
魚の環世界 12

付録 カメラと歩く

MY KID'S DIARY

カバー表4の写真は大森一樹さんのご自宅にあるDVD棚の一部。  
〈僕の心を動かした1000本の映画〉として、  
帯のQRコードから映画のリストを見る事ができます。  
実際には約3000本あるそうです。

大森一樹『映画監督はこれだから  
楽しいわが心の自叙伝』に寄せて

村上知彦

大森一樹

おもしろいから

1952年大阪市生まれ。  
京都府立医科大学卒業。  
高校時代から8ミリ映画を撮り始め、  
1977年、シナリオ「オレンジロード急行」で  
城戸賞受賞、翌年同映画化で  
劇場映画監督デビュー。  
以後、80年に自身の医学生時代を描いた  
『ヒポクラテスたち』(監督・脚本)、  
81年に村上春樹原作『風の歌を聴け』(監督・脚本)、  
86年には氷室冴子原作『恋する女たち』で  
文化庁優秀映画賞受賞。  
88年には「トットチャンネル」、「さよなら」の女たち」  
などで文部省芸術選奨新人賞受賞。  
89年から平成ゴジラシリーズを手掛け、  
『ゴジラVSビオランテ』、『ゴジラVSキングギドラ』  
(監督・脚本)他脚本2本を執筆。  
他に、SMAP主演の「シュート!」(監督)、  
「緊急呼出し エマージェンシー・コール」(監督・脚本)、  
「わが心の銀河鉄道 宮沢賢治物語」(監督)、  
「悲しき天使」(監督・脚本)など30本を超える作品がある。  
2006年から2022年まで大阪芸術大学映像学科で  
学科長を務め、若手映画人の育成に携った。  
2022年11月逝去。



「僕の心を動かした1000本の映画」の帯に、大森一樹さんの自筆で書かれた「1000本近く、これじゃ毎日5本を見ても二〇〇日かかかってしまっている」となり、「どうして全部見ることができないのか」「なにしてしまっている」と。

これからの世代へ  
語り継ぐ、  
映画とともに  
生きる喜び。

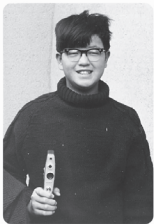
僕の心を動かした1000本の映画

大森一樹監督の本棚に残された  
映画のリストを公開中!  
<https://note.com/littlemore/m/mbabc6b723465>



◆夢を抱いたまま映画に  
つなごめられて生きていくと  
◆一九八一年の切符  
◆大好きな映画を  
自分の物にしておくために  
◆映画の「味」について  
◆日本映画の明日はどちらだ  
◆他多数収録

8ミリ少年の  
夢と情熱  
リトルモア



「オレンジロード急行」、  
「ヒポクラテスたち」、  
「風の歌を聴け」、吉川晃司三部作、  
斉藤由貴三部作、  
「ゴジラ」シリーズ等  
日本映画界を揺るがす才能で  
娯楽映画を作りつづけた監督が  
人生を振り返り綴った、  
最後のエッセイ。

永遠の映画少年、  
大森一樹が  
遺した言葉。



映画監督は  
これだから楽しい  
大森一樹

映画監督はこれだから楽しい 大森一樹

わが心の自叙伝

ISBN 978-4-89815-579-0  
C0074 ¥1800E

定価:本体1,800円+税  
リトルモア

大森

一樹の文章をいっつも、うまいこと書きよる  
なあとと思う。気どったところがなく、素直  
でわかりやすい。遺稿となった神戸新聞連載をみて、  
興味を引くエピソードやちよつとしたオチが用意されて  
おり、彼の映画同様のサービスピ精神にあふれている。

大森一樹がその最初の著書『MAKING OF オレンジロ  
ード急行』をびあから出すことになった時、カンツメに  
なっている山の上ホテルへ神戸から陣中見舞いに駆けつ  
けた。なにしろ25歳の現役医学生が、いきなり松竹から  
監督デビューという大騒動の真つ只中。マスコミ取材や  
映画の仕上げ作業と並行しての、大量の書き下ろしはさ  
ぞや大変だったに違いない。だが寝不足の目をこすりな  
がらも、これまで自分が書いたものや資料などもおり混  
ぜながら本作りに熱中する姿に、根っから人を楽しませ  
たい性格なのだと感じた。

2冊目の『虹を渡れない少年たちよ』は、映画監督と  
して雑誌などに書いた文章を集めた一見普通のエッセイ  
集。だが、実際には改めて大幅に大森の手が入っており、  
関連する原稿を数編つなげて書き直し一つの流れを作っ  
たり、原稿の前後にマクラや注釈、後日談などを書き加  
えて新しいものにしてしまったり。まるで単行本で作品  
を描き変える手塚治虫みたくだが、これまた大森の編集  
好き、サービスピ好きによるものだろう。

身内の同人誌などは別として、編集者として大森一樹  
に連載を依頼したことが一度だけある。ぼくが編集長だ  
った『ブレイクガイドジャーナル』の判型をB5に変えた  
時、新企画として連載エッセイを頼んだ1人が大森だっ  
た。ちょうど前作『風の歌を聴け』のあとの長いブラン  
クの時期で、大森自身がつけたタイトルが「1983年  
のマンホール」という小ささか自虐的なもの。企画が  
次々にポシャっていく様子が繰り返して書かれて、何処か  
のエッセイで村上春樹氏から同情されたほどだった。

そんなところへ舞い込んだのが、吉川晃司というアイ  
ドルを、歌と同時に主演映画を公開してデビューさせよ  
うという企画。連載の後半は、この映画「すかんびんウ  
オーク」の立ち上げから完成までのリアルな記録となっ  
た。こうして大森一樹は、無事マンホールから抜け出せ  
たのだった。

むらかみともひこ 1951年、兵庫県生まれ。  
まんが評論家・編集者。大森監督とは高3の時、  
文化祭の上映会で出会って以来の友人。自主製作  
時代の代表作「暗くなるまで待てない!」には製  
作・共同脚本・出演として参加している。

別丁扉

伊野さんは全部で4枚の絵を描いてくれて、  
わたしたちと編集の富真さん、大森さんの  
ご家族と相談して選びました。

映画監督は  
これだから楽しい  
大森一樹



わが心の自叙伝

リトルモア



わが心の自叙伝

2002年、京都府生まれの作家・脚本家、神戸新聞から編集者の依頼を受け、自らの映画人生を振り返るエッセイを綴った。病気の治療を受けるながら書き上げた原稿は24篇。その後も、行くも11月に完成された。生後四年の「セイイ」がいた。

# 一年遅いぞ！ 阪神タイガース

西岡琢也

## いつも

映画のことばかり考えている人だった。読書も映画のネタ探しのため、小説をよく読んでいた。

動向を知りたいのか、日本映画も小まめに観ていた。「アレ、観たか？」と聞かすが、僕は日本映画がライイなので大抵観ていない。「酷いぞ！」と吐き捨てるので「観んときやええやん」と返すと、「日本映画はもう終わりや」と毎度言った。彼の映画の理想は『冒険者たち』であり、007、『リオの男』だ。

因みに彼は映画館の最前列で、体を捻じ曲げるようにして観る。よくあんな近くで観られるもんだといつも思った。自作のために俳優への目配りも怠らない。伊藤蘭、巻上公

一、大江千里を起用したのは彼が最初だ。

音楽の話はしなかった。音痴だった。キタの絵沢萌子ママの店で一緒に飲んだ時、カラオケで歌おうとしたのでトイレに行った。便器に向かうとワイルド・ワンズ「思い出の渚」が扉越しに聞こえてきた。かなり調子づかずれた。出かけたものが止まった。

大好物はタマゴ。居酒屋におでんがあると、「タマゴ！」と一番に注文する。タマゴがあればとにかく喜ぶ。うちで脚本打ち（合わせ）をした後、酒を飲んでべに嫁さんがご飯とハムエッグを出したら、「お前の家はここでタマゴが出るんか?！」といたく感激していた。あの言い振りは未だに耳に残っている。

大阪芸大は最寄り駅から送迎バスで10分。車内の（飲食禁止）の貼り紙を見ると、彼を思い出す。よく車内で菓子パンを食べていた。パン屑をぼろぼろ下にこぼす。貼り紙は彼が原因だと学生たちに話している。

熱狂的なタイガースファンで、選手や試合の話をしつつ中していた。実はうちの嫁さんも阪神を盲愛しており、シーズン中はCSを契約して阪神戦の初回の1球目から観戦する。

ある時期、試合が勝つとうちに電話を掛けて来た。僕にでなく嫁さん宛てだ。二人で勝利の喜びを語り合う。彼はライチなので時間はそう長くない。僕がいよいよといまいと話していた。ある時から掛けて来なくなった。あれは何だったんだらう。

理想の日本シリーズは阪神対オリックスだとよく言っていた。それが今年実現した。

一年遅かった。

にしおかたやく 1956年、京都府生まれ。脚本家。代表作に『ガキ帝国』『TATTOO-刺青』あり『沈まぬ太陽』『はやぶさ』遠かなる帰還、T.Vドラマ『京都迷宮案内』シリーズ、「返還交渉人」など。

# テキストと映画棚から 著者を見つめて

當眞文（リトルモア）

## 大森

一樹監督の一周忌に合わせて、エッセイ集を作ることになった。神戸で育ち、高校生の頃から八ミリカメラが相棒で、医大に通いながら書いた脚本で城戸賞を受賞、商業映画監督デビューを果たし、生涯三〇本を超える映画を世に送り出した巨匠。略歴を読めば、目を見張るくらい華しかった。はるか遠くで輝く人。どんなふうにも本を作ろうかと悩んでいると、大森監督の熱心なファンである植田豪さんが監督の著書をとっさり送って下さった。

「まず何ものよりもテキストを」。これは私が尊敬している翻訳家に言われ、いつも念頭においている言葉だ。大森監督はたくさん映画を撮った人だが、文章をたくさん書き残した人でもあった。私はひたすら文章にあり、大森作品を観られるだけ観て、想像をふくらませていった。幸い、ご家族の了承を得て、下北沢の事務所映画制作時の資料を見る機会もいただいた。二〇箱を超える段ボールに台本やノートがぎっしり。面白い手書き文字が個性的で、一貫しているのがかつよかった。

大森監督の文章を読んでいると、人と出会い、巻き込み巻き込まれ、一作品ずつ楽しんで撮っている姿が思い浮かぶ。同時に、表現者の苦悩や反抗心も垣間見られる。特に印象的だったのが、二九歳の時のエッセイだ。テレビ番組の企画に呼ばれて高校生の撮った作品を見た時のこと。

「その時、カメラのアングルを巧みに変えてさもロククライミングをやっているように見せておいて、最後にアングルを戻すと、地べたを一生懸命這いまわっておりましたというギャグに、スタジオに集まった百人近い高校生の間でドオツと大笑いが起こった。同席していた藤本義一氏が後で、その映画の作者たちに「あんなギャグは、僕らが二〇年前にテレビで一生懸命やっていたもんですよ」と、チクリ。僕はといえば、そのギャグの「送り手」よりも、むしろバカ笑いでしまう「受け手」の方になんか不満だった。」

映画館に行く人が少ない。本が売れなくなっている。そんななか、既視感のある、お決まりの、何からしさを堂々と見せたものが、大衆にウケている……。大森監督の不満は、私の胸にぐさっと刺さった。お会いしてお話してみたい。



『ヒポクラテスたち』清順、黒澤に並んだ!

当時『ヒポクラテスたち』(1980年)を上映していた日劇文化にて

映画 会社は、映画を全て自社の資本で作る自社の映画館で上映し利益を得る製業だ。映画監督はそのための独自の人材であり、映画会社が育成した。大学を出て入社、撮影所で助監督として十年から十数年修業した後には監督となる。一九七〇年代の日本映画ではまだそれが常識とされており、映画会社は東宝、松竹、

東映、日活の四社だけだった。

まどうっかしい話を書き連ねたのは、二五歳の若さの映画少年が松竹映画の監督をするのだが、当時どれだけ衝撃的なニュースだったか、誰でも名乗れば映画監督になれる現在からは想像もつかない危険な時代だ。だからといって、自慢しようというのではない。誰でも映画監督になれる時代は、それだけ映画監督になりたい人が多いということに他ならない。助監督十数年の人もいない、自分の方が才能があるという映画青年もいる。「羨望的」がいかに疲れることか、「出る杭は打たれる」を実感もした。快挙というよりブイイングの声が多い気さへした。

『オレんじろ道路急行』が公開され、興行成績がさほどでもないとなると、潮が引くように狂騒は去って行き、医学部の最後の二年を過ごすべく京都に戻った。昨年逝去されるまで生涯に渡って私の伴走者となる映画プロデューサー、佐々木史朗さんから連絡があったのは二年が過ぎた頃だった。

ATG(アート・シアター・ギルド)は一九六〇年代に国外の芸術映画の配給・上映から始まった会社で、七〇年代には独立プロと提携し低予算の日本映画の野心作を次々製作していたが、芸術と興行の問題などから体制を委縮、佐々木さんは新しい社長に

わが心の自叙伝

とうま・ふみ 1990年、山梨県生まれ。リトルモアの書籍編集者。主にエッセイや子ども向けの本、実用書、翻訳書を企画・編集している。

# 森英二郎 思い出のクリフォード⑩

1964年大阪のフェスティバル・ホールで  
デューク・エリントン楽団のコンサ  
ートに9歳上の姉が連れて行ってくれた。コンサ  
ートのことはほとんど覚えていませんが終演後に  
エリントン協会（大阪のデューク・エリントンの  
ファンクラブ）の人たちの打ち上げについて行っ  
て、大阪のお姉ちゃん達に囲まれてご機嫌なエリ  
ントンさんを見ながら僕は端っこの方に座ってい  
ると隣にいた黒人の人が、タバコ吸うか？ と声  
をかけてきたので、いや、吸いません、16歳やし、  
とか言ったら、そばにいた人が、この人エリ  
ントン楽団でバリトンサックス吹いてるハリー・カ  
ーネイやでと教えてくれたので、思わず握手した  
のを覚えています。その店の名前とかは忘れてし  
まったけど、その時の写真は今でも持っています。

もり・えいじろう 1948年、京都府生まれ。関西のタウン情報誌  
「プレイガイドジャーナル」の表紙、野外コンサート「春一番」ポ  
スター、『荷風と東京「断腸亭日乗」私註』（川本三郎 著）、絵本  
『おとうさんのうまれたうみへのまちへ』など。



**デューク・エリントン**  
Duke Ellington  
1899-1974

# 日日読書 大西良貴

23

London Books  
616-8366 京都市右京区嵯峨天龍寺今堀町22

おにし・よしたか 1974年、京都府生まれ。京都嵯峨嵐山にある古書店  
London Books店主。文芸書を中心に、人文書、美術書、絵本、サブカル  
チャーなどを扱う。観光客と地元の人に支えられ営業を続ける。

夏目氏の本のなかでも、時折読み返す一冊。「あやしい読書」「まともなマンガの読み方」「気まぐれブック・ガイド」など、読書をめぐるあれこれを絵と文章で綴る。同じ頃読んだ『手塚治虫はどこにいる』を皮切りに氏は本格的にマンガ評論も手掛けるようになるが、本書はまだそういう構えがなく、気ままに何でもありという趣き。お得意の模写や自分の来し方を振り返る章も。氏の人間性や読書の好みが見えやすいように、特別好きだ。

読んだのはハタチの頃、くだけた語り口ながら物の本質をつかむ文章が快感だった。ボクが「本についての本」を好んで読む癖は、この本で決定付けられたと思う。以降、氏の本を熱心に読み続けるようになり、京都の大学での講演にも駆けつけた。質疑応答の際質問し、氏はとても丁寧に答えて下さったが、舞い上がっていて何を質問したのかと思いつけな

夏目房之介『読書学』  
潮出版社／1993年

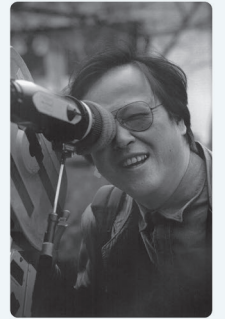
大森 公樹は、映画やテレビドラマまで、その作風が、とても多くある。このなかには、大森監督の代表作（へ）のなかから、最近の作品をいくつか紹介する。

**大森 一樹 随筆集**



映画監督はこれだから楽しい  
おもしろ自伝  
大森 一樹

リットモア



(左)章扉 (右)表紙

『明るくなるまでこの恋を』（1999年）  
テーマ曲のために大森さんが書いた  
歌詞の紹介ページ

「明るくなるまでこの恋を」は、阪神・淡路大震災の復興事業で被災者支援活動にボランティア（1年と2年）の経験を受けた制作された短編映画。大森監督が手がけたテーマ曲の歌詞（右頁）は、上映上の都合で訂正されていたが、現在は完成制作品のDVDやBlu-rayなどに掲載され、輸入人たちが受け付けている。

「明るくなるまでこの恋を」は、阪神・淡路大震災の復興事業で被災者支援活動にボランティア（1年と2年）の経験を受けた制作された短編映画。大森監督が手がけたテーマ曲の歌詞（右頁）は、上映上の都合で訂正されていたが、現在は完成制作品のDVDやBlu-rayなどに掲載され、輸入人たちが受け付けている。

年譜

大森 一樹 (年譜)	1974年	1975年	1976年	1977年	1978年	1979年	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年	1985年	1986年	1987年	1988年	1989年	1990年	1991年	1992年	1993年	1994年	
3月5日 大阪市東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる	3月5日 大阪府東区西成区に生まれる

大森 一樹 (年譜)	1995年	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	
4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)	4月 『オキテ、キミに』 (単行本)

大森 一樹 (年譜)	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
12月 学術雑誌『首立録の病状と予後』 (単行本)	12月 学術雑誌『首立録の病状と予後』 (単行本)	12月 学術雑誌『首立録の病状と予後』 (単行本)	12月 学術雑誌『首立録の病状と予後』 (単行本)	12月 学術雑誌『首立録の病状と予後』 (単行本)	12月 学術雑誌『首立録の病状と予後』 (単行本)	12月 学術雑誌『首立録の病状と予後』 (単行本)	12月 学術雑誌『首立録の病状と予後』 (単行本)	12月 学術雑誌『首立録の病状と予後』 (単行本)	12月 学術雑誌『首立録の病状と予後』 (単行本)

年譜



出沒! アド街ツク天国  
テレビ東京 2023.10.18 放送

続

ぼくの映画館は家から五分

25

伊野孝行

映

画じゃなくてテレビです。昼間『肉の堀田』で客と店員が「今日アド街ツク天国だね」と話しているのを耳にした。その夜「今からウチでみんなでやーのやーの言いながら見ませんか」とHさんからの連絡。

みんなというのは『フィシツフ・キユツフェ』（近所に住むデザイナーN君の隠れ家のような自宅兼カフェ）の常連たち。店主の人柄がこの店では高確率で愉快な人と親しくなれる。おかげで新宿方面のバーには足が遠のいた。そんなフィシツフにアド街の取材は来ていない。

「友達が『月見湯』で風呂に浸かってたらいきなりカメラが入ってきたらしい」という前情報。店や場所の順位予想表まで作ってスタンバイ。『堀田』のコロケもある。こんな感じでテレビの前に並ぶなんていつ以来だろうか。放送開始直後から順位や紹介にいちいち大騒ぎ。強気で会話に割り込まないとはじき飛ばされる。ちなみに我が『下高井戸シネマ』は5位にランクイン。

終盤、街のスナップショットが次々流れるコーナーでフィシツフの外観が一瞬映った。ワッ! と上がった歓声はサッカー日本代表のゴール並。この店がなければ今日の集いもない。みんな同じ街で関係なく別々に暮らしていたはず。酔った頭にそんなことがよぎる。

「ああ、今年イチ楽しい」と思わずもらしたライターのSちゃん。おいおい、すでに10月も半ばだよ。

いの・たかゆき 1971年、三重県生まれ。イラストレーター。第44回講談社出版文化賞、第53回高橋五山賞。著書に『画家の肖像』『となりの一休さん』などがある。テレビアニメに「オトナの一休さん」。最新刊は南伸坊さんとの対談本『いい絵だな』。

メモランダム・本のデザイン 18

『RAOUL DUFY  
L'ENCHANTEUR』

その1  
日下潤一

アンカットのこういうシンプルな外装の並製の本は、フランスの伝統という。気に入れば立派な装丁に仕立て直す。判型は色々ある。いまでもこのタイプの本はつくられているのだろうか。余計な説明はせずに今回と次回はこの本、つづけて別の興味深いものを紹介しようと思っています。

RAOUL DUFY L'ENCHANTEUR (ラウル・デュフィ 魅惑的な人)。デュフィは、マチスやドランと共に20世紀初頭のフォービズムを代表するフランスの画家。この本は詩人ビエール・カモによるデュフィ。1947年、MARGUERAT、イスの版元。簡素できれいな本。本文・天地170ミリ、左右133ミリ。天アンカット。本文の絵は、モノクロとカラーの別刷で貼り込まれている。パリ14区のものザンブの蚤の市で見つけた。35ユーロ。

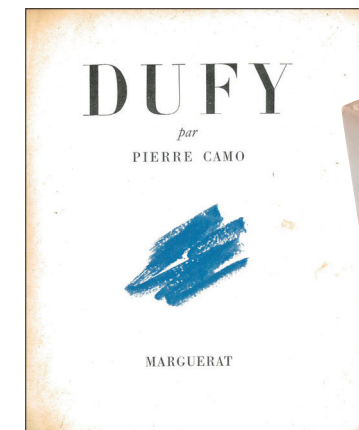
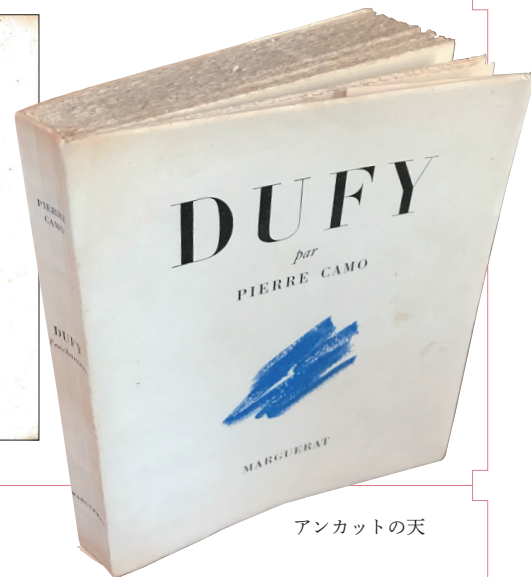
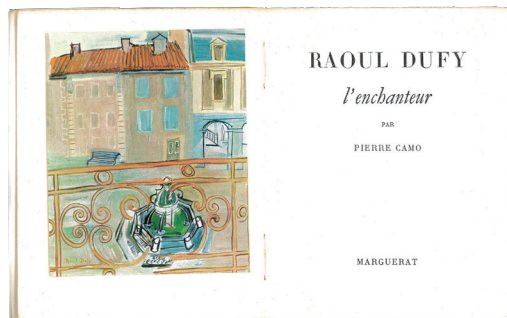


表1

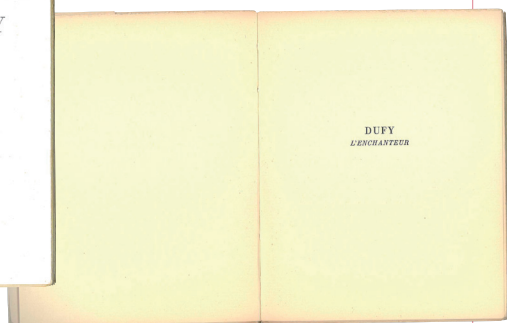
シンプルな背



アンカットの天



左/本扉 右/ハーフタイトル





# 関川夏央 昭和残照 人生はジュークボックス

## 「もんた」

＆ブラザーズの歌手、もんたよしのりが二〇二三年十月十八日、亡くなった。本名は門田頼命だそう。解離性大動脈瘤破裂、七十二歳だった。一九九六年に亡くなった司馬遼太郎とおなじ病気、おなじ年齢だった。

「もんた&ブラザーズ」の最大のヒットは「ダンシング・オールナイト」、一九八〇年に発売されて、レコード大賞の何とか賞をとり、紅白歌合戦にも出た。その頃は私もこの曲を好んだ。その頃は

民放テレビの歌番組が多かったし、パチンコ屋では始終流行歌を流していた。私の場合、そのほかにジュークボックスで聞く、というのがあった。なじみの神楽坂の坂の途中のバー「マキ」にはジュークボックスが置いてあり、そこに「ダンシング・オールナイト」が入っていた。百円入れると「ダンシンオールナイ、言葉にすれば、ダンシンオールナイ、ウソに染まる」ともんたがハスキーな声で歌ってくれた。彼が「一発屋」といえるのかどうかわからないが、とても懐かしい。

塩化ビニールの45回転レコードを何十枚も内蔵したジュークボックスの全盛期は一九五〇年代から六〇年代にかけてで、八〇年にはもう時代遅れになっていたが、その店「マキ」のママは古風な機械を偏愛した。山崎ハコ「織江の唄」なども入っていた。『青春の門』という小説を全く好まなかったのに、山崎ハコの暗い熱唱を選曲したのが私も、たしかに時代遅れであった。

「マキ」のママは当時五十歳くらい、自分を語りたがる人ではなかったが、言葉の断片を繋ぎ合わせるような歴史が見えた。一九三〇年（昭和五）頃、満洲の朝鮮国境近く、通化に生まれた。当地の女学校生徒だったときに終戦となり、朝鮮人の迫害を受けつつ陸路を南下、ひどい苦勞の末に引き揚げた。二十歳頃だった五〇年代前半、赤坂の高級クラブ「コパ・カパーナ」のホステスになっ

た。長身で、若い頃は美貌であったと思われるが、想像力に欠けた私は気づかなかった。十歳ほど年下の根本七保子というホステスとはそこで一時同僚だった。根本七保子は十九歳で店をやめ、インドネシアに渡った。政治的人身御供だったといわれる。彼女は六二年、正式にスカルノの第三夫人になった。

私は七八年頃からママの店にたまに顔を出していたのだが、そのうちジュークボックスが壊れた。もう塩ビ盤レコードのボックスは日本にはないといわれ、ママは泣く泣くCDのに入れ換えた。それも壊れるとインターネッツ経由、デジタルのボックスになった。二〇〇四年ころから店は休みがちになった。会えないままにママが亡くなったと知ったのは二〇〇六年である。胃がんだったという。親族のいない彼女の最晩年の面倒を見たのは、開店以来長いなじみだった近くの出版社の編集者たちだった。ママの本名が松下洋子、享年七十五というのも、彼らの一人からのちに聞いた。

もんたよしのりの計報に接して、まず回想したのはママのことだった。「ダンシング・オールナイト」のあとに、「元氣な絶望」ともいうべき空気の一九八〇年代と「清潔な頰」の九〇年代がつづいた。そのあとママは、引揚げと戦後の苦勞の記憶を抱いたまま世を去り、青年だった私は四十年後、おとなしいおじいさんになりかわった。

## 西では

風呂屋と言う。銭湯とは言わない。中のタイル絵が富士山なのは、東西共通か。

なぜ富士山か。ラジオから広沢虎造が流れる。十八番の次郎長だ。虎造節を唸ってみたいが所詮は素人、下手くそだ。風呂屋なら素人でも上手く聞かえる。湯舟につかると目の前に富士山、そこは清水港、次郎長を存分に唸る。それで富士山になったとの説がある。〈風が吹けば桶屋が儲かる〉式で面白い。

江戸の大火の頻発で、日本橋の材木置き場を大川（隅田川）の向こう、開発途上の深川の佐賀町へ移した。元禄期、そこを蔵の町に変えるので、富岡八幡宮の東の入り江を埋めて再移転した。木場の変遷も玉突きのように。古本屋の店頭でゴンで杉本苑子『永代橋崩落』を見つけ、深川に興味を持った。永代橋がどこにあるのかも知らなかった。深川をウロつき、鉄の永代橋も渡った。

大坂は安井道頓が作った道頓堀のように商人が町作りを金を出したが、江戸は徳川將軍家が差配、永代橋も五代綱吉の命で架橋された。しかし修理・維持費がかかるので廃止して舟渡しにせよとなるが地元民が反対、橋の経費は深川町内の負担で落着いた（通行人から橋銭二文徴収。とても賄えない）。

文化四（一八〇七）年八月十九日、十三年ぶりの富岡八幡宮の祭りに見物が殺到、永代橋

が崩落し千四百人超の死傷者・行方不明者を出す（房総まで流された溺死体もある）。杉本は事故を巡る悲劇を連作短編で綴る。

この頃落語が誕生した。役者の給金高騰で木戸銭が上がった芝居を庶民は敬遠し、小料理屋や船宿の座敷に集まり三題噺を楽しむようになる。そこから高座のある小屋が出来、芝居噺の円生、音曲噺の扇橋、怪談噺の正蔵（いずれも初代）等、人気を博す。この連鎖も面白い（落語ネタ「永代橋」は「粗忽長屋」の永代橋崩落バージョン。六代目圓生、八代目正蔵の高座がYou Tubeで観られる）。

杉本短編の中で「椿の墓所」が出色。事故直後、釣りをしていた浪人が竹笠に乗って川を流れてきた女兒を助けるが、役人に届けただけで名乗らず帰る。浪人の女が療治に来た按摩に愚痴る。しばらくしてその按摩は、療治先の大店主人から孫娘が竹笠で助かったと聞いて自分が助けたと偽り多額の礼金をせしめ、それを元手に療治所を開く。救助話が美談として評判になり繁盛するが、按摩は浪人の動向が気になって仕方ない……悲劇の裏で

邪な人間が蠢く。

当時は四代目襲名直前の鶴屋南北の爛熟期でもある。滝沢馬琴も事故を目撃した。太田南畝は事故後被害者や遺族を訪ね歩き、貴重な証言集「夢の浮橋」を残した（杉本も一次資料に使っている）。

永代とかけたる橋は 落ちにけり  
きょうは祭礼 あすは葬礼

南畝は詠んだ。「永代」は、綱吉の治世長かれと命名されたと分かる。

溪斎英泉の絵を見ると橋の下を帆の高い舟行き交い、橋杭が思いのほか長い。あそこから落ちれば、死は免れないだろう。

僕は「椿の墓所」を軸に、さすが按摩が主役じゃダメだろうと敵討ちの兄妹を主人公に映画用のプロットを書いた。猛暑の中、方々に〈営業〉して回っているが、反応は鈍く芳しくない。

心ある人、出でよ！

## 西岡琢也

# きょうは祭礼 あすは葬礼

N'S COLUMN

にしおか・たかや 1956年、京都府生まれ。脚本家。代表作に『ガキ帝国』『TATTOO 〈刺青〉あり』『沈まぬ太陽』『はやぶさ〜遙かなる帰還』、TVドラマ「京都迷宮案内」シリーズ、「返還交渉人」など。

せきかわ・なつお 1949年、新潟県生まれ。作家。代表作に『海峡を越えたホームラン』（双葉社/第7回講談社ノンフィクション賞）『坊っちゃん』の時代』（双葉社/谷口ジローと共作・第2回手塚治虫文化賞）、近著に『人間晩年図鑑』シリーズ（岩波書店）。

イラストレーション……南伸坊



岩波文庫・2005年  
新思泉社刊・1995年



Umwelt (ウンベルト) という店名は、ベルリンで1934年に出版された本『生物から見た世界』(ユクスキュル/クリサート著)に出てくる概念に由来します。エストニア出身のドイツの生物学者ユクスキュルは、すべての生き物が独自の知覚に基づいて行動していると考え、それをUmweltと呼びました。Umweltは「環境」を意味するドイツ語の単語ですが、翻訳で「環世界」と訳されています。この連載のタイトルは、ここからとりました。

お店を作ろうと決めた2010年あたりから、店名についてあれこれ考えるようになりました。考えあぐねて友人に相談すると、ヒントになるかもと一冊の本を手渡してくれました。それが『生物から見た世界』と私のファーストコンタクト。序文から引き込まれ、読み終えるころには「Umweltにしよう」と心に決めていました。お店の物件が見つかったの

は、それから一週間ほど経ってのことです。

あらゆる生物と同様に、私たち人間にもそれぞれの主観的な世界があり、趣味嗜好や考え方はほんとうにさまざま。お店は、色々な場所で私が見つけたものを集めたウンベルトですが、そこに足を踏み入れてくださるお客さま各自のウンベルトに、少しでも響く何かを発見してもらえたらという思いを込めました。

写真の葉書は、開店お知らせにつくったものです。コペンハーゲンで見かけた古い建物のアルファベットがロゴのヒントになっています。写っている女性は、自然豊かなデンマーク・フュン島に暮らす籠作家のアンさん。彼女のアトリエで撮りました。このとき初めて見た彼女の柳の籠はどれもダイナミックで美しく、圧倒されたことを鮮明に覚えています。

うおずみ・やすこ

1977年、兵庫県姫路市生まれ。Umwelt Textiles & Objects店主。学生時代にテキスタイルを学ぶため、デンマークへ留学。帰国後、古美術店に勤めたのち2012年、京都・夷川通にUmweltを開く。

タイトルレタリング……ヨコカク(岡澤慶秀)

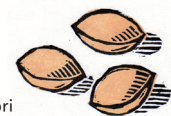
ウンベルト Umwelt Textiles & Objects  
604-0962 京都市中京区夷川通御幸町西入達磨町588-1

日下さんと伊野さんから勧められ、前号から付録でわたしの連載を始めました。6歳の息子との生活で、考えたことを書く予定。ちゃんと書いて残しておかないと、忘れてしまいそうなことがたくさんある。今号から筒口直弘さんの写真の連載もスタート。次号からは丹下京子さんの漫画も。筒口さんと丹下さんは隔月で交互に登場。11月中旬、東京国立近代美術館『棟方志功展』へ。〈基督の柵〉に衝撃。あんなキリストの絵は見たことなかった。(赤波江)

gentrificationという。gentle、gentry(紳士・貴族・支配階級)gentrify(高級化する)、ジェントルマンから。意味は、都心の衰退地区への中高所得者の移住。ロンドンオリンピックのあとに行われた、市街地高級化計画。語感の違いかgentrifyはあからさまに聞こえる。東京都内や地方都市で行われているいわゆる再開発。gentrifyを「再開発」に抽象化する計画者の狡猾さ。商業施設と超高層住宅を建てるだけ。神宮の樹木の伐採はこれ。強欲の果て。不動産業者の高笑い。あの大商店街や立石の飲食街も壊される。(日下)

今月のあとがき

E.Mori



Originally  
November 2023

26

2023年11月15日発行 <ロゴデザイン>ヨコカク <編集・デザイン>赤波江春奈+日下潤一 <印刷・製本>グラフィック <発行>ビーグラフィックス ©B GRAPHIX 2023, Printed in Japan 【無断転載禁止】

◆Web=bgraphix.com ◆Twitter & Instagram=@bgx\_book\_design ◆日下潤一のプログ=www.bgx.jp/blog/「オリジナリ」はBGXが毎月発行するペーパーです/90部/お問い合わせはakabe@bgx.jpまで





2023年2月末 松本竣介のアトリエ再現展示が  
終わってしまいう前に見ておきたい、

次女を誘って桐生の大川美術館に出かけた。

途中、前橋に立ち寄る。

以前は西武デパートの別館だったらしい  
アーツ前橋の建物、その屋上に登ってみた。



松本竣介のアトリエ  
再現展示

## カメラと歩く 1 筒口直弘

つぐぐち・なおひろ 1993年『芸術新潮』見習い  
カメラマンになりました。30年後、フィルムで  
の撮影も、コンカやミノルタも、写真雑誌も電球  
も消えました。スタジオの複写台だけあの頃の  
まま直立しています。



お

母さん、神様っているの？ 死んだらどうなるの？ 天国ってどこ？ 雲のうえ？ 天国なら死んだひとに会えるの？ 一年ほど前、5歳の息子からこんな質問ばかりされてた。

適当に答えると「ねえ、もつとちゃんと考えて答えて」とバレルので真剣に答える。子どもは、大人の適当さに厳しい。

「神様はいるけど、ひとりじゃなくてたくさんいると思うよ」

「神様なんかいないって考える人もいて、その人たちの気持ちもとてもよく分かる」

「雲のうえには無さそうだけど、なんとなく上の方にある気がするね」

「高いところから誰かに見られてると、ちゃんと生きようって思うから、雲の上にあるって考えるひとが多いんじゃないかな」

「死んだら焼かれて灰になって、そのあとは真つ暗なお墓の中；寒そうでイヤだよねえ」

「心だけ天国にいくって言う人もいる。生まれかわるっていう考え方もある」

「お母さんは天国があるって信じた方が死ぬときこわくないから、天国があったらいいなあって思う」

「天国でまた会えると思うと、お葬式がちょっと悲しくなくなるね」

わたしはそんなふうには答えていた。自分なりの答えをきちんと言葉で伝えたいが、答えはそれだけじゃないことを知っていてほしい。親が言うことがすべて正しいわけじゃないから。うんうん、とまじめな顔で一生懸命に聞いてくれる息子。

この「神様問答」「天国問答」ブームは数ヶ月続いた。

あるとき「お母さん、天国ではおばあちゃんやの姿じゃなくて、今のお母さんの姿でぼくを待っていてくれないか？」とお願いされた。オツケ、天国なら簡単に若返りもできそうなのがするしね。そんな話を一緒に笑った。それから、だんだんそういう話はしなくなっていた。「最近、天国の話してないよね」と言ったら、「まあ、そうだね」とそつげなく返された。最近仕事に夢中で、毎日、段ボールや空き箱を切り刻んでいる。名前を呼んでも返事をしてくれない。

いまガザで起きていることを、信じられない、許せないと思う。過去や未来のためでなく、今そこにある命をどうか救って、と祈る。ニュースを一緒に見ながら、息子に問われる。「なんでこの街は攻撃されてるの」「なんでみんなケガしちゃうったの」「あの子はなんで泣いているの」。できるだけかんたんな言葉で、起こっている事実を伝えたいけど、話しながら言葉につまる。

戦闘員は「神のために闘って天国に行く」と自爆テロで命を捨てる。爆撃で娘を亡くした父親は「この子はこれから天国にいくのだから」と泣きながら微笑む。

人が死んでいい理由なんて、本当は無いはずじゃないか。わたしたち大人は、なにをやっているんだろう。いつまでこんなことを続けるの。

わたしは息子と天国で会う約束をした。ほんとうはそんな約束はどうでもよくて、目の前で生きている息子の手に触れて、声が聞きたい。もつともつと、今の君と話がしたい。

MY KID'S DIARY  
2 雲のうえ 赤波江春奈

あかばえ・はるな 1985年、長崎県生まれ。愛知県立芸術大学卒業。  
2010年にビーグラフィックス入社。2017年9月に出産。先日、息子のランドセルが届いた。あと4ヶ月で小学生。

オリジナル2号 付録